

中世における論理学と文法学

山下正男

はじめに

本論文はチョムスキー文法の立場に立って、中世の論理学および文法学の評価をおこなおうとするものである。中世の論理学に関する限り、いままでから記号論理学の立場に立った評価がなされてきた。そしてその代表者としてボヘンスキーやベーナーを挙げることができよう。実際、記号論理学は数学的論理学ともいわれるように、数学とおなじ程度の厳密さと科学的客観性・非党派性をもっているので、過去の論理学に対しても、きわめて公平でしかもほぼ一義的な評価が下せるのである。

中世論理学は確かにそのうちに、現在の記号論理学からみてきわめてすぐれた業績を含んではいる。しかし中世論理学はその性格上、けっして記号論理学の先駆形態とは考えられない。というのも中世論理学は聖書を始めとする自然言語的な文書の解釈をその任務とする関係上、数学的というよりはむしろ文法的とっていい性質をもっているからである。したがって中世論理学は記号論理学の立場からだけでは十分に評価しきれないといわねばならない。

こうして中世論理学の解釈学的、文法的性質を評価することが必要となるが、そのためには記号論理学とおなじ程度の科学的客観性・非党派性をもつ文法学の存在が要求される。そしてこうした要求は、1957年に出現したチョムスキーの文法理論によって始めて満たされたといえるのである。

ところでこのチョムスキー文法の内容はのちほど詳しく説明するが、あらかじめおおよその性質を述べるならば、チョムスキー文法はその範を記

号論理学からとったきわめて科学的なものといえるであろう。記号論理学は、将棋の場合に、一定のルールからさまざまな手が編みだされるのと同じ方法を採用した。そして記号論理学の場合、このもちごまに相当するのは一定の文字記号であり、一定のルールに相当するのが形成規則 (formation rule) である。そしてこれら両者から、多くの論理式 (well-formed formula) が機械的に導き出されるのである。ただしこうしてできあがった論理式は、いちおう論理学の文法にかなってはいるが、必ずしも恒真な論理式であるとは限らない。ところが論理学とは恒真的な論理式を見つけだし、そうしたものを集めることを任務とする。そしてそのためには、まず若干個の公理をもちごまとし、それに推論規則というルールを適用することにより、さまざまな恒真な論理式つまり論理学上の定理を導き出すわけである。そしてこうした手続きとそこから生みだされた体系が、論理学の公理系と呼ばれるものである。そしてこの場合の手続きもまた、機械的なものといえることができる。

ところでチョムスキー文法の場合、もちごまに当るのは、自然言語の語彙であり、ルールに当るのは、そうした語彙から文法にかなった文をつくりあげるための文法規則なのである。そしてこの規則は、チョムスキーの場合、生成規則といわれるのであるが、これは「一定の語彙から文法にかなった無数の文を生成するための規則」という意味にはかならないのである。こうしてチョムスキー文法の場合においても文の生成は機械的な手続きによっておこなわれるといえるのである。

以上のことからチョムスキー文法のおおよその性質が把握できるのであり、そうした文法はその方法において記号論理学と共通の面をもつ。そしてその意味で、チョムスキー文法は、それまでの文法と違って、きわめて論理的な色彩をもつ文法だといえることができるのである。

I 中世論理学の文法学的性格と中世文法学の論理学的性格

まず中世論理学の文法的性格について述べよう。中世論理学の代表と呼ばれるペトルス・ヒスパヌスの論理的著作は、内容的にいて、アリストテレスの『オルガノン』およびポルフィリオスの『アリストテレス範疇論入門』といった古代論理的な部分と、『論理学小論集』(*Parva Logicalia*) と呼ばれる真の意味での中世論理的な部分とからなる。この『論理学小論集』の中には、例えば「代表」(suppositio) の理論、「関係詞」(relativa) の理論、「註解を必要とする命題」(exponibilia) の理論、「共義語」(syncategoremata) の理論等が含まれる。

代表の理論とは、ひとが“homo currit” および “homo est species” と語る場合、そうした二つの命題における “homo” という名辞はそれぞれちがった対象を代表 (supponere pro) していると主張するものであり、同じ意味をもつ語でも、コンテキストによって違ったふうに解釈しわけなければならぬと主張するものである。また関係詞論とは、qui とか qualis といった関係代名詞、関係形容詞の論理的性質を論じるものである。つぎに註解を必要とする命題についての理論は、例えば “tantum homo currit” を、“homo currit & nihil aliud ab homine currit” というふうにいいかえ、註解 (exponere) すべきであると論じるものである。そして共義語論は、「それ自身ではなにもものをも指示せず他のものと一緒になって始めてなにかを指示しうるもの」つまりいわゆる小辞 (particula) を扱う。そしてそこでは、et, aut, vel, si 等の純粹に論理的な結合詞だけでなく、nisi, quin, sive といった結合詞もと取り扱われるのである。

以上からみると、『論理学小論集』は、自然言語で書かれた文書の論理的な積義のテクニックにはかならないということがよく理解できるであろう。ところでこの『論理学小論集』は、古代論理学には存在せず、また近世論理学においてはほとんど脱落し忘却し去られているということからみて、もっともよく中世論理的な性格を示す部分といわねばならない。それゆえ中世論理学の本質は、まさしくそうした積義的、文法的面にある

と断言して差し支えないのであり、事実中世論理学はまた Sprachlogik (言語的論理学) と呼ばれているのである。

つぎに中世文法学の論理的な性格に移ろう。中世の文法学はその初期の時代においてはラテン語の聖書を読むための positive grammar つまり実定的で実際的ないわゆる実用文法にすぎなかった。そしてそれはドナトゥスやプリスキアヌスの文法書のやり方を踏襲し、簡易化したものにすぎなかった。しかし13世紀になると、そうした positive grammar は Grammatica Speculativa つまり文字通りの speculative grammar にとってかわられる。この場合、speculative はもちろん positive に対立する概念であり、それはまた、ontological, philosophical そして logical をも意味したのである。

優れて中世的な文法である思弁文法 (Grammatica Speculativa) は、そのような意味で論理的であるといえるのであるが、このことは中世論理学の代表であるペトルス・ヒスパルヌスの『論理学綱要』 (*Summulae Logicales*) と思弁文法の代表であるエルフルトのトマス (偽ドゥッス・スコッス) の『意味の様態について、あるいは思弁文法』 (*De Modis Significandi sive Grammatica Speculativa*) との関連をみればさらに明瞭となるであろう。

ヒスパルヌスでは論理学の基本的単位は vox significativa (意味をもつ音声) とされる。そしてこれには主語、述語、繫辞の三種類が含まれる。つぎにこうした三つの voces significativae から oratio perfecta (完成した文) がつくられる。そしてこれは “S est P” という形をとる。そしてさらにこうした形をもつ文つまり命題が三個集まって、いわゆる syllogismus (三段論法) が構成される。そしてこの三段論法こそが論理学の最終目標なのである。

これに対し、エルフルトのトマスにおいてもやはり、文法学の基本的単位は vox significativa である。そしてこれは dictio つまり語と呼ばれる。

ところで文法学は三段論法とちがってその最終目標は *oratio perfecta* であり。とはいえ *oratio perfecta* は論理学のように “S est P” という形をもったものだけではない。したがって *dictio* も単に主語、述語、繫辞といったものだけではない。そこでこうしたさまざまな種類の *oratio* (文) のそれぞれを構成する諸部分を、まえて *partes orationis* と名づけることにする。すると文法学では *dictio* とはそうした *pars orationis* (文の構成要素) にほかならず、それはまたいわゆる *part of speech*, *Redeteil* つまり品詞だということになる。

こうして思弁文法は普通、大きく *Ethimologia* (= *Etymologia*) と *Dyasinthetica* (*De Syntactica*) に分けられる。近代風にいえば前者は *Formenlehre* (語形論) にあたり、後者は *Syntax* (統語法, 文章構成法) にあたる。この場合 *Etymologia* は中世の始めに盛んにおこなわれたいわゆる通俗的語源論を意味するのではない。*Etymologia* は *dictionary* (辞書) 的な単語つまり *dictio* を扱うのではなく、「品詞」つまり *partes orationis* を扱うのであり、むしろそれは品詞論といわれるべきなのである。

さてラテン語で品詞といえばローマ時代から8個ときまっている。しかし思弁文法ではこうした品詞がきわめて論理的、存在論的な立場で議論される。

哲学的品詞論といえば、すでに12世紀の中頃に、ペトルス・ヘリアスはプリスキアヌスの注釈において、プリスキアヌスの品詞をアリストテレスの範疇論の立場から説明している。つまり彼はアリストテレスの10個の範疇をプリスキアヌスの8個の品詞に配当しているのである。

こうした哲学的品詞論は思弁文法において、より精密、より詳細になっていくが、この点は現代的観点からみて大して興味をそそるものとはいえない。むしろ興味深く有意味に思えるのは、構文論の方にある。そこでは文の部分である品詞が、いかにして文にまでつくりあげられるかという

構成の問題が哲学的に論じられている。そしてそこにおける「構成」(constructio) の概念は、まさしくチョムスキー文法の生成 (generation) の概念の先駆であるとさえいえるのである。

II チョムスキー文法と中世の論理学および文法学

まえにチョムスキー文法の基本的な性格を述べたが、ここでその内容にまで立ち入って説明し、それを中世の論理学および文法学と比較してみることにしよう。

チョムスキー文法は実は2本の柱から成り立っている。その一つは変形 (transformation) の思想であり、もう一つは生成 (generation) の思想である。そして実際、チョムスキー文法はまた別名、変形文法 (transformational grammar) と生成文法 (generative grammar) とも呼ばれているのである。

さきにチョムスキー文法の生成の概念は、論理学における形成の概念とおなじだと述べた。ただ、文法学と論理学の大きな違いは、前者の扱う対象が自然言語であるのに対し、後者の扱う対象は人工言語だという点にある。ところで自然言語の取り扱いに際して、ひとは必ずといっていいほど多義性や不規則性の問題で悩まされる。これに反し、人工言語はむしろそうした悩みをなくすることを主たる目的としてつくられたものだといえるのである。

ところで文法学が扱うのはあくまでも自然言語である。したがって自然言語に伴う多義性や不規則性をなんらかの仕方で処理しなければならない。そしてそのためにもち出されたのが変形の思想なのである。変形とは、自然言語の表層構造から深層構造へ、また逆に深層構造から表層構造への変形という意味である。例えば日本語で「世話をしているおばあさん」という表現は表層構造であり、二義性をもつが、これを二つの深層構造に変形させ、「(～の)世話をしているおばあさん」あるいは「(～が)世話を

しているおばあさん」とすれば二義性はなくなるわけである。

チョムスキーの文法は、文の機械的生成をその任務とするが、そうした生成をスムーズにおこなうためには、二義性や不規則性の多い表層構造においてではなく、深層構造においておこなった方が便利である。そしてそのためにはまた表層構造と深層構造を機械的に相互変換させようといういくつかの変形規則が必要とされるのである。こうしてチョムスキー文法は、生成規則だけでなしに変形規則をも必要とするのであり、この点、深層構造と表層構造の区別を必要としない記号論理学が、形成規則しか必要としないのと大いに異るといえるであろう。

さてこうした変形の実はすでに中世論理学の *exponibilia* 論の中で見うけられるのである。つまり *exponibilia* 論とは、まえに実例を挙げたように、構造が複雑であって、それゆえ論理的註解を必要とするような文をあつかうものである。そしてそれはまさに表層構造を深層構造へと変形するテクニック以外のなにものでもないのである。

チョムスキーは彼の著『デカルト派言語学』44ページにおいてこうした変形の実の先駆を『ポール・ロワイアル論理学』に求めている。チョムスキーはそこで、『ポール・ロワイアル論理学』の著者たちが、フランス語の *peu* (英語の *few*) を含む命題は表面的には肯定的であるが、実際は否定的であると主張している点に注目している。ところでこうした *peu* を含む文は実は *proposition exclusive* (排他文) と呼ばれるものであるが、この排他文には、*peu* を含むもの以外に、*seul* (英語の *only*) を含むものがあり、いずれも、見かけは肯定的だがその中に否定文を内含しているのである。そしてこうした排他文を扱うのが *exponibilia* 論なのであり、まえに述べた *tantum* を含むラテン語の文などととも、ヒスパーヌスの *exponibilia* 論に出てくるものなのである。

こうしてチョムスキーの深層構造と表層構造の区別は、彼のいうように単に『ポール・ロワイアル論理学』にさかのぼるだけでなく、実は13世紀

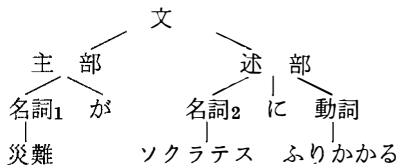
の中世論理学にまでさかのぼるのであり、ポール・ロワイアルの論理学者たちは実は、単に中世スコラの *exponibilia* 論をそのまま踏襲したものにすぎないのである。

以上でチョムスキー文法の2本の柱のうちの1本である変形概念を終えたので、次にもう1本の柱である生成概念の方に移ろう。説明を簡単にするために実例を使い、しかも日本語を例にしよう。生成文法の目標は例えば「災難がソクラテスにふりかかる」といった文を、機械的な手続き、つまりコンピューターでおこなわせようようなやり方で生成することにある。そしてそのためには以下のような6個のルールを作ればよい。

- (1) 文 → 主部述部
- (2) 主部 → 名詞₁ が
- (3) 述部 → 名詞₂ に動詞
- (4) 名詞₁ → 災難
- (5) 名詞₂ → ソクラテス
- (6) 動詞 → ふりかかる

ここで矢印はその矢印の左の語から右の語が生成 (generate) されるということを意味する。

さて以上6個のルールを適当な順に使用すると目ざす文が生成されるが、そのプロセスを図示すればつぎのとおりになる。なおこの図は樹木を逆さにした形をしているので樹型 (tree) といわれる。



上の樹型で、第1段から第2段が生成されるのにルール(1)が使われ、第2段から第3段が生成されるのにルール(2), (3)が使われ、第3段から第4段が生成されるのにルール(4), (5), (6)が使用された。そして以上

によって生成のプロセスが終結し、樹型における末端の語をつなぎあわせれば、求める文ができあがるわけである。

ところでここでまずチョムスキー文法における「もちごま」の問題についていえば、第一に注目しなければならないのは樹形の末端に出現した「災難」, 「ソクラテス」, 「ふりかかる」といった語と、それ以前に出現した「名詞₁」, 「名詞₂」, 「動詞」といった語との区別である。後者は文法書だけで使われるいわば文法用語であり、前者はどこでも普通に使われる語彙である。こうした区別は中世スコラの用語を使えば、実のところ、「第1次的命名」(impositio prima)と「第2次的命名」(impositio secunda)の区別にほかならないということができよう。こうしてチョムスキー文法とは、一言にしていえば second imposition である「文」から、first imposition である「災難がソクラテスにふりかかる」を機械的に生成する規則の集合に外ならないということができよう。

次に注目しなければならぬことは末端における語が、いまの場合、さらに「災難」, 「ソクラテス」, 「ふりかかる」といったグループと「が」, 「に」といったグループに2分されるということである。そして中世論理学でいえばこの2つのグループの前者は自義語 (categoremata) にあたり、後者は共義語 (syncategoremata) にあたるのである。

ところでさきの樹型の第3段、つまり「名詞₁が名詞₂に動詞」は、second imposition つまり文法用語と共義語とからなる。そして文というものを「名詞₁が名詞₂に動詞」といったいわゆる文型 (sentence pattern) において把握したのが、チョムスキーの生成文法の以前に流行した構造文法だったのである。ところで構造文法では確かに、名詞₁, 名詞₂, 動詞は、いわば代数学における変数、論理学における変項のように考えられ、それらの場所に first imposition の語、つまり「災難」, 「ソクラテス」, 「ふりかかる」等の単語が代入 (substitute) される。しかしそうした構造文法あるいは構造言語学の目的は、現実存在するさまざまな文の構造を研究

し、それらをいくつかの文型に分類することにあつた。したがって構造文法の立場はスタティックというべきであり、こうした構造言語学の成果を十分にとり込みながら、しかもそれをダイナミックな立場で展開させたのがチョムスキーの文法なのである。このようにチョムスキー文法はそれまでの文法における静的な構造 (structure) の思想を、プロセス (process) と手続き (procedure) に重点を置くダイナミックな生成 (generation) の思想に置き換えたという意味で、まさしく生成文法 (generative grammar) と呼ばれるにふさわしいといふことができるのである。

III チョムスキー文法と思弁文法

チョムスキー文法の本質は生成の思想にあるが、この生成の概念の先駆はまえに触れたように思弁文法における構成 (constructio) の思想にあるといえよう。そこでつぎに思弁文法における構成の概念の概略をみることにしよう。

constructio とは、チョムスキーにおいて generatio が文の生成であつたように、文の構成のことである。例えば mala accidunt Socrati (災難がソクラテスにふりかかる) というラテン語の文が思弁文法ではどのようにして構成されるかを述べよう。

いま便宜上、文を構成するプロセスを逆に遡ってみよう。するとまず oratio すなわち文は partes orationis (文の構成諸要素) に分けられる。いまの例の場合は mala と accidunt と Socrati の3つである。ところでこうした3つの partes orationis は constructio つまり構成によって oratio となるから、また constructibilia (構成要素) とも呼ばれる。

ところでこうした partes orationis あるいは constructibilia はまた、modi significandi (意味の様態) をもつともいわれる。ところでこうした modi significandi とはなんであろうか。ここでまず significare (意味作用) というものを考えてみよう。さて単なる vox (音声) と vox significativa

(意味作用をもつ音声)つまり *dictio* (語) とは異なる。 *vox* だけであると、いわゆる「馬の耳に念仏」であって、物理学的な存在ではあるが、意味をもつ存在ではない。こうした区別は、中世の論理学では、「人間は2文字からなる」と「人間は走る」における人間という名詞は前者においては *suppositio materialis* (素材的代表) の作用をもち、後者においては *suppositio personalis* (個体的代表) の作用をもつという形でおこなわれている。そして現在の論理学は、前者の場合には人間という名辞に引用符を付けて“人間”とすることによって、ただの人間という名辞と区別している。

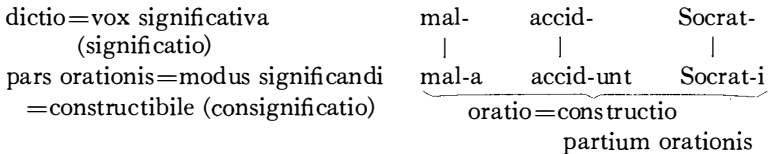
こうして文を構成する単位である *dictio* は確かに *vox significativa* として意味作用をもつ。しかし *dictio* つまり辞書に登録されているような形の語だけを何個か集めても、それでただちに文が構成されるとは限らない。ラテン語の場合、名詞や動詞は活用する必要がある。実際、 *mala, accidunt, Socrati* といった語はすべて活用した形である。こうして *partes orationis* あるいは *constructibilia* はたいていの場合、そうした活用した形なのである。したがって、辞書的な *dictio* と *pars orationis* あるいは *constructibile* は必ずしも同じとは限らないのである。

ところで *pars orationis* はいまの場合、 *mala, accidunt, Socrati* である。だとすると *dictio* とは実は、 *mal-, accid-, Socrat-* のような根根、語幹、原形といったものにほかならないということになるであろう。

さて、 *accid-* を例にとれば、それは *accido* となれば動詞となり、 *accidentia* となれば名詞となり、 *accidens* となれば動・名詞つまり分詞となる。さらに動詞の場合、 *accido* なら1人称単数現在だが、 *accidunt* となれば三人称複数形となる。 *accid-* はこのようにさまざまな形になるが、 *accid-* そのものはやはりそれ自体で意味をもつのであり、そうした意味でそれは確かに *vox significativa* であり、 *significatio* (意味作用) をもつ。そうだとすると *accidunt* といった *pars orationis* は、単に *significare* (意味)

するだけではなく、consignificare (共意味) するといわねばならない。ところでこの場合の con- は単に accid- の部分だけではなく、それに加えて -unt の部分もまた意味作用をもつということを意味する。そしてそうした事態はまた、accid-unt において、accid- のもつ significare の作用が modify されたという意味で、modus significandi (意味の様態) とも呼ばれるのである。

以上のような constructio のプロセスを生成文法の樹型になぞらえて図示するなら以下のとおりとなるであろう。



こうしていまの図からもわかるように、文法学の最終目標である oratio に達するためには、dictio の段階と pars orationis の段階の2つを経過しなければならないのである。そして文のそうした生成のプロセスのもっとも重要なつなぎの役目をするのが modus significandi の働きであり、このことは、Grammatica Speculativa を唱える文法学者たちが Modistae (様態派) と呼ばれていることから明らかなのである。

ここで以上のような思弁文法をチョムスキーの文法と較べあわせてみると、確かに文というものを単に記述的、構造的、静止的に見るのではなく、文をつぎつぎと段階的に構成しているという点では生成文法と似通っている。しかしもちろん相違点も数多く見受けられる。チョムスキー文法の場合、生成といってもそれは generation つまり作成であり、人間あるいは機械が文を生み出すわけである。しかし思弁文法の場合、生成はむしろ自動詞的な genesis (発生) であるといわなければならない。そこではまず意味作用はもつが、まだ modus significandi をもたない dictio というものが想定される。したがってそうした dictio は名詞でもなく、動詞でもな

く、副詞でもない。つまりまだいかなる品詞でもない。それゆえもちろん性、数、格もないし、時制も法もないのである。こうしたいわば混沌未分という考えはおそらくアヴィセンナの哲学の影響を受けたものと考えられるが、このような考えはもちろんチョムスキーの生成文法にはけっして見られはしないのである。

IV 思弁文法に対する評価

以上で思弁文法の概略を述べたから、いよいよその評価にとりかかろう。

(1) 思弁文法は、それが個々の単語の辞書的研究ではなく、もっぱら文章構成の理論 (syntax あるいは syntactics) をめざしたという点に、その功績が認められる。実際、中世の初めでは、cadaver (屍) という語は、実は cado (倒れる) という語に起源をもつのに、caro data vermibus (うじ虫に与えられた肉) のアンダーラインの部分からつくられたといった語源論が幅をきかせていたのである。

思弁文法がこのように文章構成をめざしていたということは、それが constructio (構成) の概念を特に重視していたことからわかる。しかし、実をいえばそうした constructio とチョムスキーの generation の間には違いがある。先にも述べたように、チョムスキー文法の出現する以前に確立された構造文法では、structure といった概念が重んじられたが、チョムスキー文法はそれに generation という概念が加えられることによって完成された。ところが思弁文法の construction (構成) の概念は、確かに structure (構造) と generation (生成) の2つの概念を含んでいたが、なおそれを十分に分化しきってはいなかったと評することができるであろう。

(2) 思弁文法は Syntax (文章構成法) を重んじたとはいえ、やはりそこにはまだ、Formenlehre (語形論、品詞論) 的傾向が残っていたといわなければならない。チョムスキー文法の樹型を見ると、その一番上の段に「文」が位置し、その一番下の段に「災難がソクラテスに降りかかった」

が位置する。つまりそこでは徹頭徹尾、文に注意が集中されている。ところがこれに反し、思弁文法において、その出発点は混沌未分の *dictio* だったのである。

また思弁文法の場合、*constructio* といっても、チョムスキー文法におけるルールによる機械的な生成とは違って、語形論的、品詞論的な要素を残しているといわねばならない。実際、思弁文法では *constructio* は *constructio intransitiva* と *constructio transitiva* の2つに分かれる。例えば、*Socrates currit* という文は2つの *partes orationis* からの *constructio* であるが、これは *constructio intransitiva* といわれる。また *lego librum* の場合は *constructio transitiva* といわれる。さて動詞を基準に置けば、前者の場合 *Socrates* という語は *currit* の主語であるが、後者の場合 *librum* は *lego* の主語以外のものである。したがって *intransitiva* とは、非移動的、つまり主語から移動しないという意味であり、*transitiva* とは移動的、つまり主語から移動するという意味であるといえよう。また通常、*intransitiva* の場合において、*currit* は *Socrates* に *dependere ad* (依存、従属) するといわれ、*transitiva* の場合においては、*lego* は *librum* を *regere* (支配) するといわれるのである。

以上のことを、まえに使った *mala accidunt Socrati* という例についていえば文の作成はまず混沌未分の *accid-* から出発し、*modus significandi* によって *accid-unt* が生じ、この動詞はそれ自らの性質により、一方においては *constructio intransitiva* として *mala* に依存し、他方においては、*constructio transitiva* として *Socrati* を支配するのである。

このようにして思弁文法は、構成を結局 *Transitivität*, *Intransitivität* の概念、いかえれば *Rektion*, *Dependenz* の概念を使っておこなうのであるが、生成文法では生成をすべて、ルールにもとづいて起こさせるのである。

(3) チョムスキー文法では意味の問題を分離し、意味の問題はもっぱら

変形文法の方にまかせるが、思弁文法では、意味の問題が未分離のままですとまといつている。

チョムスキー文法が二義性や多義性の問題つまり意味の問題を、変形規則によって解決したことはまえに述べたとおりである。ところが思弁文法は、始めから終りまで意味の問題をかかえこんでいるといわねばならない。思弁文法が *dictio* の段階から出発して、*partes orationis* の段階を経、*oratio perfecta* にまで至るということはくり返し述べたとおりである。しかしこれらのうちのどの段階においても意味の問題がまとわりつく。

まず *dictio* は *vox significativa* と定義される。つぎに *pars orationis* はそうした *dictio* に *modus significandi* が付加されたものと考えられる。そして最後に *oratio* に関していえば、エルフルトのトマスはこう述べている。「構成 (*constructio*) の完成したことの証拠は、聴き手の心に完結した意味 (*sensus perfectus*) を生成 (*generare*) させることにある。」こうして思弁文法において、意味の問題は未分離のままなのであり、結局 *generatio* とはあるまとまった意味の「生成」のことにほかならなかったのである。

結 び

以上で中世の論理学および文法学に対する、チョムスキー文法の立場からの評価を終えた。記号論理学のかわりにチョムスキー文法を評価の基準に置くことによって、記号論理学の基準でみただけでは洩れ落ちていた部分をカバーすることができたといえる。

ところで中世では、論理学と文法学はなんのため存在したのだろうか。それはいうまでもなく残ったもう一つの学科である修辞学とともに、*trivium* (三科) すなわち *artes sermocinales* (言語的諸学科) を構成したのであり、それらは、神学、法律学、医学のための基礎学科だったのである。

ところで中世の神学、法律学、医学はすべて典拠とすべき文書の解釈から出発したのであり、特に神学は“the Book of Books”（書物の中の書物），“Bible=Biblion”（本そのもの）、Scriptura（書そのもの）といわれる聖書をその中心に据えるものである。したがってそれらの学の予備学である言語的諸学科が、そうした文書解決に資するためのものであったことは明らかである。

ところで法律学や医学の依拠する文書は、いちおう論理学や文法学で処理できよう。しかし神学ともなれば事情が全く異なる。もっとも神学の典拠となる聖書もまた普通の言語で書かれているからには、論理学や文法学で処理できる部分のあることはもちろんである。しかしその核心ともいふべきところにおいて神学的文書は、いわゆる字義的な (literal) 解釈にとどまらず、レトリカルな解釈を要求するのである。そしてここで字義的解釈とは論理的、文法的解釈を意味し、レトリカルな解釈とは、寓意的 (allegorical)、転移的 (tropological)、天上的 (anagogical)、象徴的 (symbolical)、比喩的 (metaphorical, figurative) 等々の解釈のことを意味するのである。

ところで確かに三科のうちの論理学と文法学は、現在、記号論理学とチョムスキー文法という形で科学的理論にまで到りつくことができた。とはいえ修辞学に関する限り、まだ信頼するに足る科学的な理論が出現していない。修辞学にしてそうであるから、神学的解釈のテクニクとして、修辞学よりももっと高尚だとされているアナロジアの理論などはなおさらのことである。いやそもそもそれらに関して非党派的で科学的な理論が成立しうるものかどうかさえ疑問である。しかしそれはさておき、三科のうちの二科までは現在、科学的というに足る理論が成立しているのであり、これを基準にして過去の業績を評価できるようになったといえるのである。